

特別小特集



私の七転び八起き



編集にあたって

編集チームリーダー 森川博之

大学院時代、素晴らしい研究が成し遂げられるまでの背景を少しでも知り、自身の研究にわずかでも役立てられないかと思っていた。

研究テーマはどのように見つけられたのだろうか。幅広い分野にアンテナを常に張っていることが基本にあり、その中で蓄積された膨大な知識がある時点での環境と融合されることで、突然変異的に画期的な問題意識が生まれたのだろうか。あるいは、優れた研究者というのは抜本的に思考形態が異なっているのだろうか。

研究テーマを模索している時期は、優れた研究者の方々であっても苦痛な作業であったのだろうか。それとも、我々とは根本的に異なり研究テーマ模索期間もわくわくされていたのであろうか。

研究が進展しない時期、何をやってもうまくいかないときは、どのようにされていたのだろうか。

研究を始める時点では、どの程度まで成果あるいは結果を予測できていたのだろうか。成果や結果などは余り気にせず、単なる強い思いや興味だけで始められたのだろうか。あるいは、当初は別の方向を考えられておられたのだろうか。結果を得るまでに、どのような御苦勞があったのだろうか。行きつ戻りつたどり着かれた結果なのだろうか。

大学院時代、常にこのようなことを考えていたように記憶している。論文には最終結果が記されているだけで、そこに至る過程はやみの中である。素晴らしい結果を得るまでのプロセスを少しでも理解するためには、優れた想像力が必要となるかもしれないなどと思ったりもした。

今回の編集チームメンバーとのこのような雑談が本特別小特集号の出発点であり、何かを成し遂げるまでの「過程」に焦点を当てた特別小特集号の企画が始まった。

当初は、「私の失敗談」というタイトルで検討を進めていたのだが、優れた人にとって「失敗」というのは存在しないかもしれない、言葉として不適切かもしれない、あるいは今まで失敗したことはないと言われてしまうかもしれないとの懸念から、「私の七転び八起き」というタイトルで進めることとなった。企画にあたっての編集チームの思いは以下のとおりである。

- ・ 「全力を尽くした失敗は人を感動させる」「失敗談は成功話よりも10倍役に立つ」「先人の失敗談は学ぶべき貴重な情報の宝庫である」「成功は多くの失敗の積み重ねの上に成就される」「失敗を直視し、克服していくことが技術進歩につながる」「失敗と成功が往復するダイナミズムこそが創造の駆動力だ」などと言われるように、失敗談を学会員で共有できる特別小特集号としたい。
- ・ 10名程度の方々に、それぞれ2ページで研究、開発、事業、勉学における失敗談を語って頂く。
- ・ 「七転び八起き」の内容については特に指定しない。執筆者の先生にお任せする。

このような思いに御賛同頂いた7名の方々に執筆をお願いして本号は出来上がった。なるべく多くの方々の七転び八起き談を掲載したかったがために、執筆者の方々には限られたページ数の中でまとめて頂くことになったが、事の本質を簡潔にかつ的確にまとめて頂いた。執筆を御快諾頂いた皆様に、この場を借りてお礼申し上げたい。

特別小特集	森川 博之	大田 恭士	辻岡 哲夫
編集チーム	井上 忠宣	濱崎 雅弘	